巻頭言

年頭にあたり

藤井　雅彦
（日本画像学会会長　慶應義塾大学SFC研究所）

新年あけましておめでとうございます．

2026年の年頭にあたり，日本画像学会を代表してご挨拶申し上げます．

日頃より本学会の活動に深いご理解と多大なるご支援を賜っています会員の皆様，ならびに関係各位に，心より御礼申し上げます．

本年の干支は「丙午（ひのえうま）」にあたります．丙午は，歴史的背景から否定的な印象で語られることが多くありますが，本来の干支の意味に立ち返れば，「丙」は太陽が燦然と輝き，万物が形を成し始める段階を表し，「午」は陽気が最も高まり，エネルギーが充満する状態を象徴しています．すなわち丙午とは，芽吹きの兆しを示した昨年の「乙巳（きのとみ）」を受け，蓄えられた力が一気に外へと向かい，新たな成長へ踏み出す年と捉えることができます．このように考えると，丙午はむしろ活力と飛躍の象徴であり，日本画像学会にとっても，新たな挑戦を本格化させる節目の年であるといえるでしょう．

さて，画像領域を取り巻く環境は，いま，かつてない規模と速度で変革期を迎えています．なかでも生成AIの技術進歩は目覚ましく，テキストや静止画像にとどまらず，高精細な動画生成にまで及び，すでにキャズムを越えて，一般市民が日常的に利用し得るツールとして急速に普及しつつあります．その開発スピードと社会への浸透の速さには，驚きを禁じ得ません．

こうした急展開の背景には，生成AIが広範な産業分野に応用可能であり，大きな経済的・社会的価値を生み出す技術として期待されていることがあります．本年度の会長方針に「AIと画像との関係を3つの視点から考える」を加え，夏の役員研修会のテーマにも取り上げました．その理由としては，単に注目を集めるAIへの技術的な関心から，画像関連技術に携わる者として向き合わざるを得ない状況であるとの認識によるものでした．しかし改めて全体を俯瞰するとAIの進展は，従来の画像技術の研究開発の在り方を変えるだけでなく，社会での価値とともに，その応用分野，製品やサービスの設計思想，さらには企画・製造・流通・利用に至るサプライチェーン全体にまで，連鎖的な変化をもたらしつつあります．

このような時代において，AIへの対応を，従来の画像技術の研究者・技術者のみの課題として捉えることは，もはや十分ではありません．例えば医療，製造，ファッション，メディア，エンタテインメント，社会インフラなど，多様な画像技術応用分野の実践者や，装置，材料，データ・ソフトウェア，流通を担うサプライチェーンの関係者と視点を共有しながら，画像技術とAIが社会に果たすべき役割と価値を総合的に構想していくことが，これからの学会に強く求められています．

日本画像学会は，こうした変化を一過性の技術トレンドとして捉えるのではなく，中長期的な視点に立ち，画像技術を軸とした「知の結節点」としての役割を一層強化していきたいと考えています．すなわち，基礎研究から応用，さらには社会実装に至るまでの知をつなぎ，分野や立場の異なる人々が共通の課題意識のもとで議論し，協働できる場を提供することです．その過程で，技術的価値のみならず，社会的受容性や倫理，持続可能性といった観点も含め，画像技術が社会とどのように共進化すべきかを発信していくことが，本学会の重要な使命であると考えています．

既に学会内ではAIに関する取り組みがいくつか始まっています．今後はそれらを点として終わらせるのではなく，分野横断的な連携へと発展させ，日本画像学会ならではの体系的な知の蓄積と社会への発信へとつなげていきたいと考えています．画像技術を核としながら，多様な分野と人々を結びつけ，新たな価値創出の起点となることこそが，これからの学会の将来像です．

丙午の年は，勢いと陽の気が満ちる年であると同時に，既成概念を越え，新たな枠組みへ踏み出す決断と覚悟が問われる年でもあります．本学会は，こうした時代の要請に応え，社会に「新しい光」をもたらす知のコミュニティとして，歩みを進めて行きたいと思います．

2026年が，会員の皆様にとって実り多く，新たな連携と挑戦が広がる一年となりますよう心より祈念し，新年のご挨拶とさせていただきます．